木曽川の涙

写真・文　安世鴻

音もなく流れる木曽川を遡って行くと色褪せたダムと発電所を見ることができる。建設されて70年以上が過ぎたが、今もその役割を担い電気を作っている。

日本は日中戦争の際に不足した労働力を補うために、1937年に制定された国家総動員法のもとで国民の強制動員を行った。1939年から中国と朝鮮から100万人を超える人々を日本に連行し、約4000か所で強制労働を強いた。彼らは主に炭鉱、鉱山、土建工事、軍需工場で過酷な条件の中で酷使された。

愛知県と岐阜県にも木曽川の流れに沿って工場を運営するために必要な電力の供給を目的としたダムと発電所を建設した。また爆撃に備えてトンネルを作り、工場や軍の基地として利用した。ここでも朝鮮人や中国人の徴用者が動員され、過酷な労働の犠牲になった人もいる。

木曽川の中流に作られた丸山ダムは第二次世界大戦下の電力需要のため、1944年に建設がはじまる。1945年に完成させる命令であったが人材や資材などの不足や戦局の悪化で戦争が終わるまでに完成しなかった。その後1950年から5年をかけて多目的ダムとして完成した。

兼山ダムは丸山ダムよりも下流に位置する。1939年に工事をはじめ1943年に完成した。発電所と事務所がある八百津町が提供した1935〜1945年転入分の和知国民学校学籍簿には140人の朝鮮人児童の存在が確認できるが、そのうち保護者が兼山ダム建設に従事したと推測できる児童数は56人だという（朝鮮人強制連行真相調査団編著『朝鮮人強制連行調査の記録　中部・東海編』柏書房、65頁）。

三菱第4エンジン製作所の久々利トンネルは全国各地に掘られた地下壕の中でも最大級の規模だ。長さ1.5kmの山の中は碁盤の目のようにトンネルが連結されている。当時約2000人の朝鮮人労働者が動員された。戦争が終わってからは工場として使えなくなった。

久々利のほかに木曽川周辺には工場と軍専用に使用されたトンネルが15か所ある。現在、大部分は安全のため閉鎖されているが、入口の近くまで行くことができる場所もある。この写真の平牧では、毎年7月の終わりにトンネルの中で夏祭りが行われている。

鉱山や土建工事など過酷な条件の中での強制労働には犠牲者がつきものだ。多くの工事現場での犠牲者数は正確に把握することができない。兼山ダムの場合、慰霊碑をとおして朝鮮人7名の犠牲者の名前を知ることができる。